

2. 事業の概要と成果	
(1) プロジェクト目標の達成度	<p>1. 本事業期間中に知的障がい者20名の就労ロールモデル作りと5名の知的障がい児が近隣のインクルーシブ校へアクセスできるようになる。</p> <p>2. 知的障害者センターによる生活支援のサイクルが確立する</p> <p>1. 本事業期間中に知的障がい者20名の就労ロールモデル作りと5名の知的障がい児が近隣のインクルーシブ校へアクセスできるようになる。</p> <p>現在22名(2020年1月現在)の知的障がい者が職業訓練にアクセスし、15名の職業訓練指導員の指導の下、1. 農業 2. 製菓 3. 清掃 4. クラフト 5. カフェで就労を達成している。22名が実績の就労ロールモデルである。合計で27名の知的・発達障害者が当会活動に参加したが、5名が家庭の事情や一般就労・進学のために当会を離れたが合計22名の知的障がい者がこれまで当会の職業訓練に通い、経済活動の中で就労を達成し、さらにそのうち通算5名の知的障がい者として初めての一般就労(就職)に移行した。ラオスにとって初めての就労ロールモデルが様々な職業分野で生まれ、特に5名の知的障害者が一般就労(カフェ2、私立学校の清掃2、ホテル清掃1)が誕生したことは大きな成果と言える。また、教育に関しては、2019年6月に特別支援教育専門家によるインクルーシブ教育を推進するための特別支援教育理解啓発ワークショップを実施。教師が障害について正しく理解し個人の教育ニーズに合わせた授業の実施や適切な指導を行えるようになるための工夫やノウハウの導入講義を行った。ラオスはインクルーシブ教育を国の施策と掲げ、特別支援教育校を極力作らない方針を打ち出している。インクルーシブ校へ知的障害児がアクセスするためには、受け入れ側の学校の体制が非常に大切になってくる。ラオスでは教師が特別支援教育について学べる環境がないため、支援・指導方法が分からない中現在教壇に立っていることを鑑み、本ワークショップは多くの教員の支持を得て同年11月に実践編を再度実施。2回のワークショップは知的障がい・自閉症・発達障がいの児童が学校へアクセスするための基盤作りの啓発となった。また、2019年6月に実施したサウンナケート及びポリカムサイでの知的障がい児・者調査及びワークショップを実施した際、学校に通いたいと希望している知的障がい児の親や教育行政、障害当事者団体が参加したが、本調査で専門家の指導等により、当会の後方支援と共に啓発された行政及び親、障害当事者団体の努力により、5名の知的障害児が、現地LDPAとの協力・調整のもと学校へアクセスできるようになった。2020年1月にも実情把握のためサウンナケートを再度訪問し、教師・親・本人へのインタビュー及びニーズ調査、フォローアップを実施した。このように就労と教育の面で第3期も数値的に目標していた数をクリアし本事業は大きな成果を得ることができた。</p> <p>2. 知的障害者センターによる生活支援のサイクルが確立する。</p> <p>知的障害者センターによる生活支援のサイクルは、年齢別、障害程度別、就労技能別にグループ化し、それぞれの能力に合わせた支援に分けて適切なサポートができるようになった。就労の部分はADDPと知的障害センターで行う就労移行のための技能訓練(場所:ADDP就労サポートセンター)で事業終了後も引き続き技能訓練を実施、就労サポートチームが別途編成されており、引き続き、知的障害者センターや様々な団体や企業など労働社会福祉省とも協力しながら就労機会の改善のための事業者へ広報やジョブコーチ派遣といったフォローアップなどを事業後も協働で行っていくことを確認しこれからも知的障害者の一般就労への移行へ協力していくことが決定している。</p>
(2) 事業内容	<p>1 知的障害者への日中生活支援(重度、重複知的障害含む)の確立</p> <p>1-1 センター指導員による自立した個別支援計画、アセスメントの実施、新規利用者インタビュー、プログラム支援内容の決定、職能アセスメントの実施のモニタリング</p> <p>対象者: IDA(知的障がい者センター)利用者。毎月5回実施。</p>

IDAに在籍する5歳から27歳の就学適齢期にある子ども、及び比較的重度の知的・身体重複などの通所の利用者に対して、育成された日中生活支援員が支援を実施する様子のモニタリングやアセスメント、及び日中生活支援の後方支援を実施。また、就学適齢期の生徒を年齢制限なく職業訓練の場に招き、当会において簡易職業訓練や様々な日中生活支援に係る活動をIDAのスタッフと共に実施した。

1-2 親の会定期会合の実施（毎月1回実施）

当会からの報告を中心に、平均で41名の保護者が毎月の親の会に参加。日中生活支援員やジョブコーチがそれぞれテーマを決めて発表を行った。就労や職業訓練、日中活動に関する様々な取り組みや活動の発表の場として、また親同士の連携の場としてこの定期開催の親の会の活動はとても有益なものであった。知的障がい者センター（以下IDA）からの活動報告も行っている。保護者からの報告の機会も設け、「ADDP・知的障がい者センター・親」三者の協力体制を作り上げている。ピアサポートや様々な障害に起因する病気の理解、情報提供を実施した。

2 職業訓練・就労支援の実施（ラオス人指導員のOJT含む）

2-1 農作業プログラムを通じた簡易技能訓練研修

日本人専門家（農作業・教育支援教育専門家）1名を招聘（2019年6月10日～6月19日）

日本人専門家（農作業・教育支援教育専門家）1名を招聘（2019年11月5日～11月10日）・日本人専門家（農作業・教育支援教育専門家）1名を招聘（2020年1月9日～1月15日）

2-2 清掃プログラムを通じた技能訓練研修（継続）

日本人専門家（清掃専門家）2名を招聘（2019年7月21日～28日）

2-3 知的障害者がろう者ととともに運営する、インクルーシブカフェを通じた接客技能訓練研修（ラオス人ジョブコーチと共に収入向上を目指す協働事業）及び反復練習

日本人専門家（カフェ運営専門家）1名を招聘（2019年6月10日～6月19日）

日本人専門家（カフェ運営専門家）1名を招聘（2019年11月5日～11月10日）

2-4 知的障害者アロマ製品・アートクラフト作成を通じた技能訓練研修（ラオス人指導員と共に収入向上を目指す協働の事業）

日本人専門家（クラフト専門家）1名を招聘（2019年8月26日～31日）

日本人専門家（クラフト専門家）1名を招聘（2019年10月2日～10月15日）

日本人専門家（クラフト専門家）1名の招聘（2019年11月4日～8日）

クラフト専門家（縫製）ワークショップ実施（2019年12月1日、2020年1月29日）

クラフト専門家（アロマ製品）を招聘（2020年1月20日～1月23日）

上記専門家とともにラオス人の15人のジョブコーチが育成され、ラオスで初めての知的障害のための福祉専門職として知的障害者の就労サポートを事業終了後もしっかりと行っている。

3 知的障がい者実態調査（近隣県ボリカムサイ県サワナケート県）

サワナケート県及びボリカムサイ県知的障がい者実態調査

I. 2019年6月12日～6月16日

地方の知的障がい児・者の生活の実態や、抱えている問題やニーズの調査を実施。18家族訪問 ボリカムサイ県では2名の知的障害児が学校につながった。

II. 2020年1月10日～1月13日 7家族

新規知的障がい児・者の実態調査及び前回調査後に学校に繋がった3名の知的障がい児のフォローアップを実施。教育の現場における現状把握や学校での支援体制、家族へのインタビューによるニーズ調査を行った。又サワンナケート県教師養成校を再訪問しインクルーシブ教育と特別支援教育のための教員養成の必要性についての意見交換を行った。

4. 啓発PR イベント参加

第3期は14のイベントでの製菓の販売やスタディツアーを通して知的障がい者の就労の可能性をラオス社会へ啓発した。またFBの1221フォロワーを獲得し知的障害のある人々の日中活動・就労訓練の様子がラオス知的障害者センターの活動を広報した。

5. 学校教育へのアクセス支援

・私立 Sabaidee Jr Academy に当会教育担当のジョブコーチを派遣（2019年2月～4月）

生徒の20%が知的障がい・発達障がい児であるこの学校は、障がい児のみのリソースルームがあるが、教師は特別支援教育について学んだことがない。これまで当会でやってきた教育支援や、支援の中でジョブコーチたちが工夫を凝らし作ってきた教材の紹介や提供、知的障がいのある児童への適切な対応についてのアドバイスや助言を行った。

・障害児教育関連行政担当との意見交換及びビエンチャン及びサワンナケート教師養成校訪問

特別支援教育（知的・発達障がい）の専門家である津島氏と共に教師養成学校及び労働社会福祉省、教育スポーツ省の担当部署と意見交換を実施。知的障がい児が合理的配慮の下教育を受けるには教師の育成が不可欠である。ラオスでは、教師が特別支援教育について学べる環境が現在のところない。今後教師養成学校と連携し、知的障がい児が教育を受けるための環境作りを行っていく必要があることから、政府ステークホルダー、教師養成学校の担当者に向けたブレインストーミング会議を実施。障害児が取り残されない平等な学校アクセスの重要性とインクルーシブ学校での教育的合理的配慮（教師の障害理解や障害児への教育支援法）の在り方につき考え方の共有を行った。

・インクルーシブ教育推進ワークショップ実施

現在知的障がい児、発達障がい児、自閉症児など障害を持つ児童を受け入れている又は受け入れる予定の学校の教師を対象にワークショップを実施。

1. 私立 Sabaidee Jr Academy に当会リソースティーチャーを派遣

生徒の20%が知的障がい・発達障がい児であるこの学校のリソースルームにリソースティーチャーを派遣し、これまで当会でやってきた教育支援や、支援の中でジョブコーチたちが工夫を凝らし作ってきた教材の紹介や提供、知的障がいのある児童への適切な対応についてのアドバイスを行った。

・教育スポーツ省ビエンチャン及びサワンナケート教師養成校訪問及びワークショップ開催

知的障がい児が合理的配慮の下教育を受けるには教師の育成が不可欠である。ラオスでは、教師が特別支援教育について学べる環境が現在のところない。今後教師養成学校と連携し、ミニ講習会を開きながら知的障がい児が教育を受けるための環境作りや教育的配慮について講義を実施。ラオスにお

	<p>るインクルーシブ教育推進ワークショップ実施</p> <p>I. 2019年6月11日、12日</p> <p>II. 2019年11月6日—9日</p> <p>知的障がい児、発達障がい児、自閉症児など障害のある児童を受け入れている又は受け入れる予定の学校の教師を対象にワークショップを実施した。</p>
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>上位目標である「ラオスにおいて知的障害者の新しい就労・教育ロールモデルが生まれ、知的障害者の社会自立の可能性を社会に啓発する」は達成され、本事業においてロールモデルが生まれた。</p> <p>◎知的障がい者訓練生一般就労開始</p> <p>I. 2019年2月～4月</p> <p>ビエンチャンのホテルで2名が一般就労を開始。アイロンがけ・洗濯・客室清掃を行った。</p> <p>II. 2019年8月～</p> <p>Issarapon International School にて清掃スタッフとして2名が一般就労開始。</p> <p>III. 2019年9月～11月</p> <p>市街中心地にあるカフェ bistro deebiee や Minnanocafe にてカフェスタッフとして1名が一般就労開始。</p> <p>IV. 教育に関しても学校にアクセスすることができた知的・発達障害児が5名が近隣の学校にアクセスできるようになった。</p> <p>1. 知的障がい者への日中生活支援</p> <p>1-1 センター指導員による自立した個別支援計画、アセスメントの実施、新規利用者インタビュー、プログラム支援内容の決定、職能アセスメントの実施のモニタリング</p> <p>成果：3か月に一度見直される個別支援計画によって個人に合わせた目標と支援方法を設定し、就労・生活・学習面での訓練生の能力向上が多くみられた。個別支援計画は定期的に支援員で話し合い見直しを行い、職能アセスメントを6か月に1回実施。訓練生の能力の向上と課題を客観的に把握することによって適切な支援に繋がった。</p> <p>多様な年齢で知的レベルや程度も異なる58名の知的障害者センターに所属していた多くの知的・発達障害裨益者に対して、センター指導員やジョブコーチによる個人のニーズに合わせた個別支援計画、アセスメントの実施、新規利用者12名へのインタビュー、各プログラム支援内容の決定、職能アセスメントの実施のモニタリングを実施し、センター指導員が一人で新規利用者インタビュー→個別支援計画作成→活自立度に関しアセスメント実施→支援内容決定ができ、特に就労に移行できる可能性のある知的障がい者へは職能アセスメントを実施→就労活動移行支援といったフローを理解できるようになった。18名のスタッフのうち、平均1名のスタッフが4名以上の生徒の新規個別支援計画作成から就労移行までの手続きが実施できるようになり、必要なフローの日本人専門家による期末モニタリング試験の中で100点満点中平均82.4点を得て全員が合格することができた。</p> <p>1-2. 親の会定期会合の実施</p> <p>成果：親の会を毎月実施。平均的に毎月53名の親が会合に参加し、当会、知的障がい者センター、LDPAからの報告や親同士の交流・情報交換や連携の機会となっている。</p> <p>2. 職業訓練・就労支援の実施</p> <p>農作業・清掃・製菓/カフェ・クラフトでの職業訓練では、訓練生の作業マニ</p>

ユアルに沿った作業が22人中18人(81%)が合格ラインに達している。OJTを通して作業の向上が大きくみられた。一般就労に繋がり当会を離れた訓練生に対しても、支援スケジュールを組み立て定着支援を行っている。知的障がい者が社会で働きやすい環境整備とスタッフへの障がい者に対する理解醸成を行っている。

日中生活指導員のアセスメントでは6人中5名(80%)が100点中80点以上の合格ラインに達成している。

ジョブコーチに対するアセスメントでは15人中14名(83%)が85点以上の合格ラインに達している。また、一人のジョブコーチが3名以上の生徒の新規個別支援計画作成から就労移行までの手続きを理解し、何人かのジョブコーチは実際に就労移行まで達成したものもいる(3名)。知的障がい者訓練生への給料は月額24ドルを達成しているが、SDGsの観点から、まだ1.25ドル/日に達していないためこの数値をクリアすることが今後の目標である。当会ではピアサポートを大切にしているため、身体障がいのジョブコーチを積極的に雇用している。障がい者の雇用が進んでいないラオス社会の中、当会での彼らの給料は平均7ドル/日、ベテランスタッフだと14.5ドル/日となっている。ソーシャルビジネスであるMarche du Lao及びMinna no caféは月の売り上げを平均で2000ドル達成しており、月額の給料保証も可能となっている。月においてはターゲットの100万キップは十二分に超えている。1日に知的障害スタッフはカフェ1日平均の顧客数は13名であり、4名の接客以上を担当している(各訓練生)

2-1 農作業プログラムを通じた簡易技能訓練研修

成果：野菜を育てる「Minna no Farm」の運営。1日に3度畑に出て5名の知的障害研修生が3名のジョブコーチと農園管理。26種類の野菜、ハーブを栽培。オーガニックライセンスも取得し即売も行っている。FBで野菜の育つ様子を定期的に広報。近隣のラオス人、在留外国人31名の顧客を獲得している。日本人専門家が職業訓練の様子を視察、アドバイス、農具の工夫、写真や絵による仕事のフローの説明書の作成等を講習会で指導。日々の支援の中でジョブコーチが抱える課題について専門家から助言・アドバイスを受けた。有機野菜ライセンスも取得ができたことで今後の農作物のマーケティング、販売等のビジネストレーニングも専門家講習会で実施。

2-2 清掃プログラムを通じた技能訓練研修

成果：2019年8月に新規オープンするホステルで清掃及びクリーニング業務を受託。業務開始に当たっての基本的スキルを培うためのワークショップを実施。ベッドメイキング、トイレ掃除、シャワールーム掃除など多岐に渡り清掃の技能を磨いた。

2-3 知的障害者がろう者とともに運営する、インクルーシブカフェを通じた接客技能訓練研修(ラオス人指導員と共に収入向上を目指す協働事業)及び反復練習)

成果：Minnanocafeがオープンして2年。年間1451名(延べ)の顧客を集客。カフェ運営に関しては、日本人専門家は北区十条のスワンカフェ(知的障害者の働く場)に長く勤務している豊富な経験から知的障害者がカフェ従事を行う上での衛生面、接客指導、マニュアル作成、朝食提供のトレーニング、接客、掃除、メニュー開発(パン製造開始)などのアドバイスを行い、それぞれの職業能力も多様な知的障害がかかわることができる仕事の細分化の方法の指導を受けた。パン製造・販売を行ってことで大幅に収益も増えた。

2-4 知的障害者アロマ製品・アートクラフト作成を通じた技能訓練研修(ラオス人指導員と共に収入向上を目指す協働の事業)

成果：アロマ製品「Pamai Lao」のブランドを作り、アロマスプレー、ハーバルボール、リップバーム等を製作。販売。クラフト専門家と共に商品開発からデザイン構築、簡単な作成フローの策定、衛星管理、ジョブコーチへの指導。*Coi 日本のラオス織物を使用したランチョンマットやひざ掛け等の製品の縫製を受諾。知的発達障害研修生3名が従事。クラフトカバン、コースター、知的障害研修生が描く絵をデザインしたクラフト作成等上記全ては商品化され Minnanocafe で販売している。

3. 知的障がい者実態調査（サワンナケート県及びボリカムサイ県）

成果：知的障がい児・者の家庭を訪問し生活の実態調査を実施。2019年6月にはサワンナケート県及びボリカムサイ県18家庭を訪問し本人と家族へのインタビューを行った。2020年1月に新たに7名の調査を実施。サワンナケート県及びボリカムサイ県で合計25家族、27名の調査を行った。

4. 啓発PRイベント・事業PRの実施

成果：事業期間に以下の啓発・PR活動を実施。

2019年2月	COOL&CAWAI I JAPAN ブース出店 ダンスワークショップ（インクルーシブスクール）
3月	Vientiane International School スタディツアー
6月	ユニバーサルスポーツ（サワンナケート県 TTC）
7月	久原本家(株)視察
8月	JICA 教師海外研修
9月	Lao Fashion Weeek イベント参加・ブース出店 Minna no Café パンフェスティバル（第1回）
10月	ワクワクトウンテンマーケットブース出店 Minna no Café パンフェスティバル（第2回）
11月	Civil Society ブース出店 日立造船(株)イベントブース出店
12月	国際障害者デーブース出店
2020年1月	ジャパンフェスティバルブース出店

合計14回のイベントへの出店や団体・企業受入れの中で、知的障がい者訓練生との交流やイベントでの商品販売を通じ障がい当事者たちによる障がいへの理解醸成を図った。また、イベントやカフェでの顧客142名に商品やサービスの満足度調査を実施、99%の顧客から「大変素晴らしい」という評価を得た。

5. 学校教育へのアクセス支援

成果：ビエンチャン県及びサワンナケート県における知的障がい児・者実態調査の際に学校に通いたいと希望する5名の知的障がい児が現地LDPAの協力によりその後学校へ繋がった。2020年1月にはフォローアップのため再訪問し、教育の現場における現状把握や学校での支援体制、家族へのインタビューによるニーズ調査を実施した。

・特別支援教育専門家招聘の際、教師養成校役員、教育スポーツ局 inclusive education セクター、教師養成セクター、ビエンチャンのインクルーシブ校教師による知的障がい児に対する教育の重要性と教師養成の必要性に対する意見交換を行った。

(4) 持続発展性

職業訓練を受けてきた知的障がい者22名とジョブコーチ15名はそのまま当会と知的障害者協会が共に協力し立ち上げたソーシャルビジネスチーム Marche du Laoに移行される。プロジェクト終了後もADDPと親の会、知的障害センターと連絡を密にしながらしっかりソーシャルビジネスの後方支援を行う。雇用と事業、活動の継続をサポートしていく。このソーシャルビジネスとともに「持続可能」であることを目指し最終的に訓練を経て一般就労に移行することを目的に活動を継続していく。今後の活動内容に大きな変化はなく、ジョブコーチ達はこの3年間で培ってきたノウハウを生かしそのまま知的障がい者に対する就労支援を継続。訓練生たちも当会の職業訓練に通所する。プロジェクトの中で製菓・カフェ・清掃・クラフト・農業と各活動の専門家の指導や助言を受け、多くのことを学び能力を培ってきた。当会のソーシャルビジネスへの取り組みはまだ始まったばかりだが、プロジェクトを通じて多くの専門性を身に付けたジョブコーチと訓練生達の力を更にビジネスに繋げ、助成金に頼らない組織づくりに注力していく。また、教育支援も障害児教育の管轄が保健省・労働社会福祉省から教育スポーツ省と移行過程でもあることから今後も新しい主管の教育スポーツ省と連携しながら知的・発達障害児の教育アクセスの保障について当会はしっかりとカウンターパートと連携しながらしっかりと取り組んでいく。